



最後にひとつだけ
お願いしても
よろしいでしょうか2

鳳ナナ
Nana Otori



RB

レジーナ文庫



登場人物紹介

ジュリアス

ハリストン王国の第一王子。
超優秀な王位継承者でありながら、
人からかって遊ぶのが好きな
腹黒い性格の持ち主。

スカーレット

時を司る神クロノワの
祝福を受けている公爵令嬢。
その力と拳で数々の悪を成敗して
きたことから、教国の鉄拳姫や
撲殺姫などと呼ばれている。

レオナルド

スカーレットの兄で、
ジュリアスの腹心の部下。
破天荒な妹と上司のせいで
胃痛に悩まされている。

ナナカ

獣人族の諜報員。
ワンデミオン公爵家の
執事として仕えている。

パラガス

聖女守護騎士団の団長。
熱血タイプで、部下からの
信頼も厚い。

サーニヤ

ディアナ聖教団の聖女。
スカーレットのことを
「お姉様」と呼び
慕っている。

テレネツツア

スカーレットの婚約者だった
第二王子カイルをそこのかし、
婚約破棄させた張本人。
その罪を問われ、王都から
追放されたのだが……？

ディオス

聖女守護騎士団の
筆頭騎士。飄々とした
性格の裏には、なにやら
秘密がありそうで……？

目次

最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか 2

7

書き下ろし番外編

終わりよければすべてよし、ですわ。

363

最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか？

第一章 私にだって、可愛げくらいありますわ？

「レオお兄様。私、温泉旅行に行きたいと思っっていますの」
 「で、今度は誰を殴りに行く気だ、我が妹スカーレットよ」

古い紙の匂いが香る、ヴァンディミオン公爵邸の書斎でのこと。

椅子に座ってティーカップを傾けていたお兄様——レオナルド・エル・ヴァンディミオンは、私が告げた休暇の予定に難色を示されました。

「お兄様ったら、またそんなに眉間に皺をお寄せになつて……。私はただ、この休暇を利用して温泉旅行に行きたいと申しているだけですわ。それなのにお兄様ときたら、まるで私が新しい獲物を見つけた肉食獣であるかのような言い方をなさるのですね。そんなに自分の妹が信用ならないのですか？」

そう言いながら顔を伏せ、よよと泣き真似をしてみます。

そしてダメ押しに、小動物のような上目遣いで一言。

「私、悲しいです」

しかし、そんな小細工がお兄様に通用するわけありません。ティーカップをテーブルに置いた彼は、ため息をつきながら口を開きました。

「見え透いた嘘を……。売られていく仔牛のような目で、憐憫の情を誘つても無駄だ。そういったやり口には、昔から散々騙されてきたからな」

お兄様は半目で私を睨むと、自首をうながすように語りかけてきます。
 「怒らないから、正直にどこへなにをしに行くのか言いなさい。うしろめたいことがないなら言えるだろう？ まあ、あるからこそ誤魔化しているのだろうが……」

はなから嘘と決めてかかる、この態度。まったくもって解せませんわ。

まあ、旅行に出かけたい理由は温泉に行く以外にもあるのですが……。うしろめたいことなど、神に誓ってこれっぽっちありません。

「レオお兄様は、仔牛を売った経験がおりなのですか？ ダメですよ、そんなことをなさつては」

「仔牛が可哀相だとも言いたいのか？」

「いいえ。牛は乳からお肉、皮や内臓にいたるまで、まったく無駄のない家畜です。ちゃんと大きくなるまで育てて、余すことなく絞り取らねばもったいないではありませんか」

人差し指を立てて語る私の様子を見て、お兄様が呆れたようにつぶやきます。「……お前はもう少し、可愛げというものを覚えたほうがよいと思うぞ。なにかという」と口より先に手を出すし……」

まあ、酷い。私にだって、可愛げくらいありますわ。

口より先に拳が出るのも、ちよつとした愛嬌あいきょうというものですよ。

そのせいで物騒な事件に巻き込まれたこともございますが、それも乙女の愛嬌あいきょうゆえのこと。私に非は一切ありません。

いえ、そもそも最初から私に非など、まったくなかったと言つてもよいのではないのでしょうか。

——あれは二ヶ月前のこと。

ヴァンデイミオン公爵家の一人娘である私は、婚約者だったパリスタン王国第二王子のカイル様に、舞踏会で婚約破棄を言い渡されました。

そればかりか彼は、男爵令嬢テレネツアさんと結婚すると、その場で宣言なさったのです。

バカで自己中心的なカイル様に、幼い頃から散々嫌がらせを受けてきた私。この宣言がきっかけで、長年溜め込んできた鬱憤うっぷんをとうとう爆発させることになりました。

テレネツアさんとカイル様はもちろん、その場にいた第二王子派の貴族達の顔を片っ端から殴り飛ばし、舞踏会を血に染めたのです。

どうしてそんなことが貴族の令嬢である私にできたのか、ですって？

それはこの世界に加護と呼ばれる神様の奇跡が存在し、私はその力を使うことができるからです。

我が国パリスタン王国のあるロマンシア大陸では、人々は必ず、数多いあまたる神様の誰かに祝福されて生まれます。

普通は自分がどの神様から祝福されたのか気づくことはありません。けれどごく稀まれに、授かった祝福を自覚し、神々の力を発現できる者がいるのです。

その力は、加護と呼ばれています。

加護の力は、祝福を授けてくださった神様によって様々です。

私は時を司つかさどる神クロノワ様から祝福を受けているため、時間を加速させたり停滞させたりすることができます。

また、時空神クロノワ様の加護はとて稀少きせうなので、私はパリスタン王家の保護を受けています。

そのため、私が数多あまたの貴族を殴り飛ばした『舞踏会血の海事件』のあとも、一切お答こた

めがありませんでした。

「……失礼する」

あの舞踏会のことを思い出していた私の耳に、澄んだボーイソプラノが聞こえてきて、書斎のドアが開かれました。

入ってきたのは、執事姿の黒髪の少年。彼はティーポットを載せた台車を押しながら、こちらに向かって歩いてきます。

「……おかわり、そろそろいる頃かなと思って」

「ああ、ちょうどいい頃合いだった。ありがとう、ナナカ」

お兄様が労いの言葉をかけると、無表情のまま少年がこくりとうなずきます。

黒髪で琥珀色の瞳を持つ彼は、獣人族のナナカ。

彼との出会いもまた、中々に衝撃的なものでした。

期せずして撲殺パーティーになってしまった舞踏会のあと、ナナカは私の命を狙う暗殺者として、目の前に現れたのです。

ですが、それは彼の意思によるものではありませんでした。

彼は悪徳貴族の奴隷だったのです。

ナナカの胸元には、絶対服従を強制する奴隷の証——奴隷紋が刻まれていました。

それ故に、ナナカは自分の意思とは無関係に、無理矢理働かされていたというわけですね。

事情を知った私は、加護の力を使ってナナカの奴隷紋を消してあげるかわりに、私を暗殺しようとした人物を教えるのと取引を持ちかけました。

そうして得た情報をもとに首謀者を追い詰め、見事ブン殴って事件は解決。そのあとお兄様が「我が家の執事として働かないか」と彼をスカウトし、いまに至るというわけです。

もともと真面目で几帳面な性格のうえ、手先も器用なナナカは、あつという間に執事の仕事を覚えて、いまやお兄様やお父様に重宝されています。

無愛想な言葉遣いは相変わらずですけどね。うふふ。

「そうだ。ナナカ、お前からも言ってやってくれ」

「……なんの話だ？」

「我が愚妹スカレットがなにかを企んでいるようなのだが、温泉旅行に行くなどとデタラメを言って誤魔化そうとするのだ」

「……また？」

ナナカが呆れたような目で私を見つめてきます。

またとはなんですか、またとは。

私が嘘偽りを申したことなど、一度や二度くらいしかありません。

「レオお兄様は過保護がすぎるんですわ。ねえナナカ、貴方からも言ってくださらない？」

『スカレットは裏表のないお淑やかな淑女なのだから、謀などするはずがない』って。ね？」

清らかな笑みを浮かべながら、ナナカに語りかけます。

するとナナカは、私とお兄様の間で視線を行き来させてから、ふいにお兄様のほうへ歩み寄りました。そして、私に向き直ってこう言ったのです。

「……正直に言ったほうがいい。どうせすぐバレるんだから」

自分の主張が支持されて、お兄様がうむうむとうなずきます。

ナナカの裏切り者。もう今日はよしよししてあげませんからね。

「そう恨めしそうな顔をするな。ナナカとて、お前を心配して言っているのだぞ？」

お兄様の言葉に同意するように、ナナカがうなずいています。

「……スカレットは、放っておくとなにをするかわからない。ゴドウィン事件の時だって、僕がついていくと言わなかったら、多分一人で乗り込んでいたし」

その名前を聞いた瞬間、彼のお肉を叩いた感触を思い出して、私の拳がうずうずと震

えました。

ゴドウィン・ベネ・カーマイン様——我が国の元宰相であり、ナナカを仕向けて私を暗殺しようとした張本人です。

私が舞踏会で殴った貴族の中にどうやら彼の息子がいたらしく、その復讐を果たすべくナナカに暗殺を命じたのだとか。親バカにもほどがありますね。

さらにこのゴドウィン様、法で禁止された奴隷売買に手を出したり、汚職をもみ消したりと、悪逆の限りを尽くしていたのです。私が公衆の面前で婚約破棄されたのも、この方が裏で糸を引いていたせいでした。

世のため人のため、こんな所業を見過ごすわけにはまいりません。

そうして私は、鬱憤を晴らすのにちょうどいいサンドバッグ——ではなく、パリスタン王国にはびこる巨悪の権化を打ち倒すと決意したのでした。

「まったく、私の傍にはただでさえ手に負えないお方がいるというのに……お前にまで好き勝手に動かされては身が持たん」

「まあお兄様、心外ですわ。私はあの腹黒い金髪のお方のように、まわりくどい真似などいたしません。やるならば正々堂々、まっすぐ顔面に、ですわ」

「そもそもやるなど言って——っ！ うっ、胃痛が……ナナカ、胃薬をくれ」

顔を歪めてお腹を押しさえるお兄様。そんな彼に胃薬を手渡しながら、ナナカが小首を傾げました。

「……ところで、なぜさつきから二人とも、あの人の名前を伏せているんだ？ 腹黒い金髪のお方って、第一王子のジュリア……むぐ」

しーっ、とナナカの唇に人差し指を当てて、お口をチャックさせます。

「めっ、ですわよ、ナナカ。聞いたことがあるでしょう、夜中に口笛を吹くと悪魔がやってくるという言い伝えを。あのお方もそれと同様です」

うかつに名前を口走ろうものなら、どこからか聞きつけて「私の陰口で盛り上がっているうつけ者がいるらしいな？」などと言いながら現れかねません。

「あのお方は地獄耳なのです。なにもしなくとも勝手に現れるというのに、名前など口にしては、召喚魔法で呼び寄せるようなものですよ。二人で家を抜け出した時のことを忘れませんか？」

あれは、いざゴドウィン様を成敗せんと王都に向かおうとした時。家を出た私とナナカの前に、あのお方は待っていましたとばかりに現れました。

名前を呼んではいけない金髪のお方——そう、パリスタン王国第一王子ジュリアス・フォン・パリスタン様です。

ジュリアス様は、私達がゴドウィン様をブン殴ろうとしていることを知り、「面白そうだから自分も一枚噛ませろ」と言い出しました。

「……でも、ジュリアスがいなかったら、あんなに早くゴドウィンに辿り着くことはできなかった。だから、そんなに目の敵にしたら可哀相……って、頭を撫でるな」

首を傾げながらブツブツと話すナナカが可愛かったので、とりあえず頭を撫でておきます。

そう。業腹なことですが、ジュリアス様はとても優秀でいらっしやいました。

ゴドウィン様が主催していた奴隷オークションの情報にあっさりと手に入れたり、警備隊を指揮して彼を追い詰めたり——もしジュリアス様の協力がなければ、ゴドウィン様をブン殴るところか、相見えることすらできなかったかもしれません。

本来であれば感謝すべきで、憎まれ口を叩くなどもつてのほか。けれどあのお方は、私を散々からかった挙げ句、「貴女は最愛の玩具だ」などと言って乙女の気持ちを弄んだのです。それを考えれば、この程度の扱いで十分でしょう。

「どうしたスカーレット、突然黙り込んで。それに少し顔が赤くなっているようだが、風邪でも引いたのか？」

「……なんでもありませんわ。久しぶりに動いたので、ちよつと体温が上がっただけです」

心配そうにこちらを見るお兄様に、大丈夫だと言うように微笑みを向けました。体調が万全でないのは事実ですので、嘘は言っておりません。

なにしろゴドウィン様を成敗するために潜入した奴隷オークシヨンの会場では、悪徳貴族のみならずやたら邪魔をする兵士やらを、加護の力全開でブン殴りましたからね。

流石の私も体力、精神力ともに尽き果てて、それから一ヶ月は部屋から出ることもすらできませんでした。あれから二ヶ月経ったいまでも、完全に回復しているとは言い切れません。

たくさんのお肉を殴ってストレス発散できたので、私としては大満足でしたが。

「お兄様のほうこそ、体調はいかがですか？ このところ本当にお忙しくされていたではありませんか」

奴隷オークシヨンの悪徳貴族達が一斉に捕らえられた結果、パリスタン王国では大規模な人事革命が起りました。

国王陛下とジュリアス様は、身分や性別にかかわらず、有能で勤勉な方々を積極的に要職に起用。そのせいでジュリアス様の部下であるお兄様は、二ヶ月にも及ぶ連続勤務を余儀なくされていました。

レオお兄様は先日やっと休暇に入り、生ける屍のようなお顔でヴァンデイミオン公

爵領にある本邸へ帰ってきたところです。

「ああ、おいたわしいレオお兄様。どこぞの腹黒い王子様に馬車馬のごとく働かされたせいで、最愛の妹を信じる気持ちも忘れてしまったのですね」

「私が忙しく働くはめになったのには、お前にも責任の一端があるということを、当然認識しているのだからな、愚妹よ」

そう言って私を睨むお兄様を笑顔で誤魔化しつつ、彼の座る机に歩み寄りませう。雑談はさておき、そろそろ本題に入りませう。

「ご覧ください、レオお兄様」

私は自らの銀髪を一房手にとって、その中の黒く染まっている部分をお兄様の目の前に差し出しました。

「消耗した加護の力はほとんど回復しましたが、この部分だけどうしても銀髪に戻らないのです。せっかくお兄様に綺麗だと言っていたいた髪ですのに。私、申し訳なくて……」

加護の力は強力であるが故に、デメリットも存在します。

それは力の種類や祝福を授けてくれた神様によって様々ですが、私の場合、使いすぎると身体機能が低下したり、このように髪の色が変わってしまったりすることがありま

した。

大抵は時間が経てば回復するものの、奴隷オークションの一件から二ヶ月経っても、一部の髪が黒く染まったまま戻っておりません。

思えばあの舞踏会から奴隷オークションに至るまで、通常より加護を多用したにもかかわらず、まともに休む暇がありませんでした。髪の色が戻るまで時間がかかっているのは、きっとそのためでしょう。

「私に気を使う必要などない……だが、確かにこれは心配だな」

私の黒髪交じりの銀髪を手に取り、お兄様が目を伏せます。そして思案するかのよう
に顎に手を当てながら言いました。

「……それで、湯治に行きたいということか」

「その通りでございます。以前、我が家に遊びに来てくださった友人に相談をしたところ、霊験あらたかな温泉宿をいくつか紹介していただきまして……」

私は地図を広げ、国の東西南北に位置する温泉の場所を指し示しながら、ルートを説明します。

すると、お兄様はなにかに思い至ったらしく、探るような視線を私に向けて口を開きました。

「……そういえばお前は、いつもこの時季になると、決まってどこかへ旅行に行きたがるな」

「そうでしたかしら。レオお兄様の気のせいでは？」

「間違いない。私は一度記憶したことは絶対に忘れないからな」

とほける私に、疑惑に満ちたお兄様の視線が突き刺さります。

とりあえず、それらしいことを言って誤魔化してみましようか。

勘の鋭いお兄様に通用するとはとても思えません……

「仕方ありませんね。白状いたします。実は——」

「もしや、聖女様を殴る機会をうかがっているわけではなかるうな？」

「……はい？」

お兄様がなにやらとんでもないことをおっしゃいました。

こんな言いがかりをつけられたら、本来は即座に否定したいところです。

しかしとりあえずはお兄様の言い分を聞いてみるとしましようか。

「昔からお前はなにかと理由をつけては、傲慢な貴族や悪人を殴りたがるだろう？」

「世のため人のため、ですわ」

「聖女様を信仰している。ディアナ聖教も、国やその他各所に多額の寄付を要求して

いるからな。お前の言う世のため人のために殴られる対象となっても、おかしくはないだろう?」

「……なるほど。一理ありますわね」

パリスタン王国には、ふたつの大きな宗教組織が存在します。

ひとつはここ数年の間に国の権力者たちを中心に信者を増やし、国教に認定されるまでにいたったバルミア教。

そしてもうひとつが、パリスタン王国建国当初から存在するディアナ聖教です。

バルミア教は女神バルミア様を信仰しているのに対し、ディアナ聖教は魔を祓う力を持った聖女ディアナ様を信仰の対象としています。

どちらの宗教が国教と呼ぶにふさわしいかと問われれば、ディアナ聖教だと私は答えるでしょう。

バルミア教は現在国教とされているものの、成金商人をトップにすえた、厳かな雰囲気のない宗教です。それよりも、古来よりこの地に根づいていて、民衆の支持も厚いディアナ聖教のほうがはるかに信頼できますからね。

ですが、ディアナ聖教とて完全に真っ白と言えるわけではありません。

ディアナ聖教は神ではなく人間を信仰しているうえ、先ほどお兄様が言った通り、多

額の寄付金を国から受け取っているのです。

そのお金は、ディアナ聖教が国防にとって大事な役割を担っているからこそ提供されているもの。ですが、民衆はその事実を知らされていないため、昨今ではディアナ聖教のあり方に疑問を持つ人も増えており、バルミア教に改宗する方も少なくないとか。

もし私がディアナ聖教と国防の関係を詳しく知らなかったなら、彼らが宗教を利用してお金を騙し取っていると考えてもおかしくはないでしょう。

ですが……たとえ聖女様が私の拳を叩きつけたような悪いお方だったとしても、それは絶対に不可能なのですよ、お兄様。

「毎年この時季に行われること——それは、聖地巡礼だろう。もし私の心配が当たっていて、お前が、聖地巡礼を機に聖女様を殴ろうなどと考えているのなら、絶対にやめておけ。あのお方の……聖女ディアナ様のお力は本物だ。実際にこの目で見た私が保証しよう」

お兄様の言う、聖地巡礼とは、一年に一度、ディアナ聖教主導で行われている行事のことですね。

その内容は文字通り、聖女様を連れただ一行が、東西南北それぞれの国境沿いにある聖地を巡り、とある儀式を行うというものです。

「お兄様は去年、巡礼の一行に同行し、そこで直に儀式をご覧になりました。お兄様がそうおっしゃるのであれば、疑う余地はありませんね」

「あつさりど肯定する私に、お兄様は眉間に皺を寄せて疑わしげな表情を浮かべます。『悪徳宰相飛翔事件』以来、いままでもも増して疑り深くなっていらっしやいますね。」

大方、なんの躊躇もなく宰相様を殴った私であれば、聖女様であっても容赦なく殴るだろうと思っているのでしょう。

流石ですわ、お兄様。とてもよく私のことを理解なさっておいでです。ですがいつものところ、私が聖女様を殴る予定はございません。

「レオお兄様。聖女様は国民から愛され、国からも必要とされているお方です。表でも嫌われ、裏の顔も真つ黒だった宰相様とはまるで違います。そのようなお方を無闇に殴るうなどは、流石の私も考えておりませんよ。ご安心くださいませ」

落ちて着いた調子で話す私に、お兄様はまだ訝しげな表情を向けています。

「それに私は本当に温泉旅行に出かけたいだけですのよ。いつもこの時季に……とおっしゃいますが、今はちようど休暇の時季。それが聖地巡礼のタイミングと同じなので、お出かけしたくなる時季といつも重なってしまうだけですわ」

「……この件に関してなにひとつ、嘘偽りもやましいこともないと私に誓えるか？」

「誓いましょう」

しばし見つめ合ったあと、お兄様は深いため息をつかれます。

そして身体の力を抜いて椅子に深く腰かけると、険のとれた穏やかな声で言いました。

「……わかった。温泉旅行を認めよう。だが、くれぐれも問題は起こさないよ——」

「ありがとうございます。では、早速出発するといたしますわ」

「……は？」

お兄様が啞然とした顔で、素っ頓狂な声を上げられます。

私はスカートを摘まんで優雅に一礼すると、微笑んで別れの言葉を口にしました。

「それではご機嫌よう、レオお兄様、ナナカ」

「ま、待て！ 出発するって、いまずぐに行く気か!？」

「……大体こうなることは読めていた。いつてらっしやい」

慌てて席から立ち上がろうとするお兄様と、諦めた顔で手を振るナナカ。そんな彼らに背を向けて、駆け足で書斎から廊下に出ます。

そのまま一足飛びに階段を駆け下りた私は、玄関から外へと飛び出しました。本邸の中は大騒ぎになっていることでしょう。

しかし、いまの私はお兄様から外出の許可をいただいた自由の身。

何人たりとも止めることは敵いません。
だって奴隷オークションの一件以降、ほとんど家から出してもらえなかったんですもの。

少しくらい羽目を外しても、バチは当たらないでしょう？

と、そんな解放的な気分で本邸の正門をくぐり、我が家の敷地を出ますと——
そこには王家の紋章が刻まれた豪華な馬車が一台、待ち伏せするかのように停車しておりました。どうやら私の自由な時間はここまでのようです。

「随分と遅かったな」

馬車の陰から出てきた金髪殿方が、私の顔を見るなり憎まれ口を叩きます。

遅かったな、ではありません。

貴方とは王都で落ち合う予定だったはず。なのになぜわざわざここまで来たのでしょうか、このお方は。

予想するにお兄様から逃げてくる私を見たかったとか、そんな意地悪な理由でしょうけど。

まったく、相変わらずの腹黒っぷりでございますね——ジュリアス様は。

このたび旅行へ行きたいと言い出した本当の理由。それは、私が聖地巡礼に向かう一



行のメンバーだからでした。

ジュリアス様は王族の代表として、今回の聖地巡礼を見届けるお立場でいらっしゃいます。そして実は私も、ディアナ聖教とは深い関わりがあり、巡礼に参加しなければならぬ立場。物心ついた頃より毎年巡礼の一行に同行しております。

けれど私が同行することは、聖地巡礼の関係者以外には明かせない秘密。

そのため、今年は領地でお留守番のお兄様には、温泉旅行に行くとは伝えませんでした。

まあ、巡礼で訪れる先に霊験あらたかな温泉があるのは本当ですし、ついでに湯治もしたいと思っておりますので、嘘はついておりませんよ。

「淑女を待つのは殿方の務めでしょうか？ 大人しく王都で待つこともできないのですか？」

挑発的に微笑む私に、ジュリアス様はとびっきりの黒い笑みを浮かべて言いました。

「くくつ。貴女が淑女としての扱いを期待するような人だったとはな。面白い冗談だ」

「これでも私、公爵家の令嬢なのですから。まったく、相変わらず口の減らないお方ですわね」

「いい加減慣れる。それが私の素だ」

もう慣れましたし、疑いようもありませんわ。貴方が腹黒王子だという事実はね。

「ちなみに今年は、どんな嘘をついてレオの追及を逃れてきたのだ？」

「人聞きが悪いですわね。私は嘘などついておりません。事実の通り、温泉旅行に行くと言って、ちゃんと許可をもらってきましたもの」

私の答えを聞いて、ジュリアス様がフツと鼻で笑います。

「確かに嘘ではないが、ものは言いようだな。真実を知ったレオがあとでどんな顔をするのか、いまから楽しみで仕方がないぞ。ククツ」

はい、出ました。これがこのお方の本性でございます。

人の苦悩する顔や、うるたえる顔を見るのがなによりも大好きという、サデイスト腹黒王子。たまに甘い言葉をささやかれたとしても、決して騙されてはいけませんよ。私も改めて肝に銘じておきましょう。

「さて、立ち話はこれくらいにして、そろそろ王都へ出発するでしょうか。私と一緒にいるところをレオに見られても面倒だろう？」

そもそも立ち話を始めたのは一体どなただったかしら？

と、無駄な応酬を重ねても疲れるだけですわ。心の広い私は、ジュリアス様に「はいそうですわ」と同意してあげます。

うまく殿方を立てるのも、淑女の役目ですからね。

「レデイ、お手をどうぞ」

そう言って、ジュリアス様が芝居がかった仕草で手を差し出してくれます。その手を取り、私は完璧かつ優雅な所作で馬車に乗り込みました。

さあ、まいりましょうか。

温泉旅行ならぬ、聖地巡礼の出発地点——王都グランヒルデへ。

第二章 死ぬほど痛いだけですわ。

グランヒルデへ向かう道中では、山賊の襲撃などがないかと期待していた私。ですが、そういったトラブルはなく、平和そのものといった感じで退屈にもほどがあります。

それはジュリアス様も同様だったらしく、馬車での旅も三日目に差し掛かった時、「退屈しのぎになにか話せ」と要求してきました。

上から目線の発言に、何様？ とおもいましたが、暇を持て余していたのは事実だったので、仕方なしに二人で雑談をすることに。

温泉旅行に行きたいと言った私を、なぜお兄様が引き留めようとしたのかお話しして差し上げました。

「くっくっく……！」

馬車内にジュリアス様の含み笑いが響きます。

一体なにがこの方の笑いのツボを刺激したのでしょうか。

「では、レオは貴女が毎年この時季に出かけたがる理由を、聖地巡礼の隙について聖女

を殴るためだと思っていたというわけか」

「あの話しぶりから察するに、そうなのではないでしょうか」

「ダメだ、こらえきれん……！ はははっ！」

お腹をかかえて笑うジュリアス様。

そのまま笑いが止まらなくなつて、笑い死にされればよろしいのに。

「いやいや、流石は私の片腕だな。鋭い考察をしているではないか。半分正解と書いてもいらいらだぞ、その解答は」

ジュリアス様の言葉には、大いに語弊ごへいがあることをここに明言しておきます。

当たっているのは聖地巡礼の一行と行動をともしようとしている、ということだけですからね。

「そこまで疑われているのならば、聖地巡礼に貴女が同行するということにも勘づかれているだろう」

本郎が出る前にお兄様に見せた温泉旅行の道筋は、聖地巡礼のルートとほぼ同じものです。言わずもがな、気づかれていることでしょう。

お兄様が深く追及しないでくださったのは、なんだかんだ言っていて私が間違つたことではないと信用してくれているからでしょうね。

お優しいのですよ、お兄様は。どこぞの腹黒王子様と違って。

「去年はロープで全身を覆つて巡礼の旅を終えたようだが、もし今年もレオが参加していたらどうやって誤魔化ごまかすつもりだったのだ？ いや、待て。言わなくていい。それは次の楽しみに取っておくでしょう。くくっ」

「……許可が出ていないので、一応レオお兄様には伏せておきましたが……いまやお兄様も王宮秘密調査室の室長という公的な身分を授かつております。私が巡礼の一行に同行している理由を秘匿ひたくする必要は、もはやないのでは？」

王宮秘密調査室とは、国王陛下とジュリアス様が立ち上げられた諜報組織ちやうほうしきで、主に王宮内部の汚職おしよくや不正を取り締まることを目的としています。

以前は議会の承認を得ていない秘密組織として活動していましたが、悪徳上位貴族の粛正しよくせいをきっかけに、正式な王宮の機関として始動しました。

その室長を務めるレオお兄様は、国の機密を知るに足る地位にあると思うのです
が……

「いや、隠す必要はある」

「……？ どうしてですか？」

首を傾げる私に、ジュリアス様は髪を掻き上げながらドヤ顔で言いました。

「ギリギリまで黙っておいたほうが、レオの反応が面白くなるからに決まっているだろう」

ブン殴っていいですか、このお方。

「冗談はさておきだ。ゴドウインの一件以来、どうも周辺諸国の動きがきな臭くなっている。悪徳貴族どもは一掃したが、そのせいで王宮内部はまだ混乱したままだ。これを機に隣国がなにかを仕掛けようとしてきても不思議ではない。どこに諜報員ちやうほうが紛れ込んでいるかわからんからな。気をつけるに越したことはないだろう」

ゴドウイン様を捕らえることに成功したものの、彼は獄中で自殺。協力していたと思われる他国の組織など、その背後関係はまったくわからないままになってしまったのである。

残念ながら、今後またなにかが起きてもおかしくありません。

「よって、たとえレオであっても情報は伏せておくように。わかったな？」

お兄様の名前をことさらに強調する辺り、絶対に面白がっているでしょう。まったく、どうしようもない方ですね。真面目に聖地巡礼に取り組もうとしている私を、少しは見習ってほしいものです。

まあ、どのみち聖地巡礼が終わるまでは、お兄様とお会いすることもないでしょうから、いまはお望み通り口をつぐみましょう。つて、なにを勝手に私の頭に触れているのですか。私の頭を撫でているジュリアス様に、思いきり不満を込めた視線をプレゼントしてあげます。

ちよつと気を抜くと、すぐこういうことをしてきますからね、この方は。油断も隙もあつたものではありません。「ほら、私ばかりに熱い視線を向けていないで、外を見てみる。目的地はすぐそこだぞ」頭を撫で続けるジュリアス様の手をベチベチとはたきながら、言われるがままに視線を窓の外に向けます。

レンガ造りの家や店が立ち並ぶ、王都の中央通り。そこから東に目を向けると、見上げるほど高い純白の壁がそびえ立っていました。

——聖教区。

聖地巡礼の出発地点であり、不浄ふじようの壁かべで囲われた特別街区ですね。

「神々しい、と言いたいところですが……仰々うやうやしいと言ったほうがふさわしいですね、あの壁は。威圧感しか覚えませんし」

「不浄ふじようの壁かべには、城がひとつ建つほどの国費が投入されているからな。聖教区を俗

世の穢れから守るために必要だったという話だが、説得力もなにもあったものではない。これを建てるだけの金があれば、一体どれほどの政策を実現できたことか。まったく、見るたびに頭が痛くなるわ」

白い壁で囲われた聖教区内にあるのは、パルミア教とディアナ聖教それぞれの総本部です。

その周辺には大小様々な家が建ち並び、各教団関係者の方々が暮らしています。

もともとこの地域に住んでいたのは、ディアナ聖教の方々だけだったため、聖教区は小さな一街区でしかありませんでした。

そこにパルミア教が参入し、いまは貴族街に匹敵するほどの総面積を誇っています。パルミア教の勢力拡大を象徴するかのよう「不浄の壁」が建てられたことから、その隆盛をうかがい知ることができるとして、本来ならあの壁が見えたことは喜ばしいこと。

聖教区を目指してやってきた私達にとって、本来ならあの壁が見えたことは喜ばしいこと。

ですがなんと言いますか……壁の内側から滲み出てくる悪意を感じ取ってしまつて、素直に喜べないのですよね。

「俗世の穢れを遮るための壁、ですか。まるでまっとうな聖職者のような言いようです

わね。それを主張した教皇様の腹のうちは、あの壁の色とは正反対に真っ黒だというのに」
パルミア教の教皇サルゴン様といえば、商売としての宗教に目をつけて成り上がった人物。

いまでこそそれなりに信者をかかえて敬われているようですが、昔はかなり悪どい商売をしていたらしく、当時を知る商業区の方々からは「成金クソたぬき」のふたつ名で呼ばれているのだとか。

そういった噂で人を判断するのはどうかと思いつつも、サルゴン様に関してはその限りではありません。

だってサルゴン様は、清貧に身を置くべき聖職者であるにもかかわらず、でっぷりと太って脂ぎった顔をしているのですよ？ そのうえ、いかにも高級そうな宝飾品をジャラジャラと身につけているのです。

私が殴ってきた悪徳貴族の方々の特徴と、完全に一致するではありませんか。これを黒と言わず、誰を黒だと言うのでしょうか。

「実際には、その腹のうちの黒さを隠すための壁なのだろうよ。そんな下らないことのために国庫を開かされるこちらはたまったものではないがな」

吐き捨てるように言つて舌打ちをするジュリアス様。

「バルミア教を国教まで押し上げたのは、確かゴドウィン様でしたね。宰相様がバックについていたのであれば、国庫を開かせるのも容易よういということですか」

私利私欲を満たすために悪事を働いている者同士、利害が一致したのでしょうか。

ゴドウィン様とサルゴン様が協力関係にあったのは、王宮内ではもはや公然の秘密となっていました。

それを証明する最たる例が、バルミア教を国教に認定させるために、ゴドウィン様が様々な手を使って尽力したことです。

資金を援助したり、自分の派閥に属している上位貴族達に働きかけて優遇措置をとったり。

結果、王国議会で過半数の賛成を得て、バルミア教は国教に認定されました。

一度議会を通ってしまった以上、ゴドウィン様がいなくなってもその決定が覆くつがえることとはありません。国内の膿うみを出し切りたい国王陛下とジュリアス様にとっては、目の上のたんこぶになっているのが実情です。

こんなことになるのであれば、先にディアナ聖教を国教にしておけばよかったのに、とも思います。ですが、パリスタン王家はディアナ聖教を国教と定めることにずっと難色を示していました。

ディアナ聖教は、古くからパリスタン王国の国防において非常に重要な役割を担っており、ます。

ある意味軍よりも頼りにされている立場にあるため、王家はずっと、国教化して発言権を大きくするのは危険だと主張していました。

確かに国教に認定されれば、王家に匹敵するほどの権力を持ちかねません。そうなれば王家と議会による統治は揺らぎ、国が乱れる可能性があります。

そういった背景から、ディアナ聖教は国教に認定されることなく、パリスタン王国に数多あまたある宗教のひとつとして存在してきたわけです。

まあ昔ならともかく、いまは聖女の力を信じている人も減っており、本当に国防において欠かせない存在だと知っている人はかなり少数になっています。

その隙を、悪辣あくらつなバルミア教にまんまと突かれてしまったのですが、いまやバルミア教の教皇の権力たるや、国王陛下と肩を並べるほどです。

「止まれ、止まれ！」

その時、不意に外から男性の大きな声が聞こえてきました。

それと同時に馬車が急停車して、ぐらりと大きく車内が揺れます。

「……あら」

体勢を崩して少しだけ前のめりになった私の身体を、正面に座っていたジュリアス様が抱きとめてくださいました。

こういう時はしつかり紳士然とした振る舞いをするところがまた、憎たらしいのですよね、このお方は。

「大丈夫か？」

「はい。お手数おかけしました。ありがとうございます」

「どうした？ やけに素直だな。頭は打っていないはずだが……」

真顔でのたまうジュリアス様の腹に、心の中でパンチをお見舞いします。

どうして貴方はそう、いつも余計な一言を付け加えるのでしょうか。

この方に感謝なんて、もう金輪際いたしません。

「ジュリアス様、スカレット様、申し訳ございません！ お怪我はありませんか！」

御者が慌てた様子で馬車のドアを開けて、私達に頭を下げます。

手を振って「大事な」と答えたジュリアス様は、御者を落ち着かせるように穏やかな声で続けて言いました。

「それで、一体なにが起こっている？」

「そ、それが……あれをご覧いただけますか？」

御者に促されるまま、ジュリアス様と馬車の外に出ます。

目の前には聖教区唯一の入り口である、聖門が立ちはだかつていました。

この門は、日中は常に開かれているはずなのですが、なぜかいまは固く閉ざされているよう。

これは一体どういうことでしょうか。

「門兵！ なぜ聖門を閉ざしている！」

ジュリアス様が、門の上の見張り台に立っている兵士に向かって叫びます。

兵士は叫んでいる相手が誰なのか気づくと、困った様子で敬礼しました。

「はっ、ジュリアス殿下！ 我々は教皇サルゴン様より、国王陛下の指示がない限りは誰も通すなど厳命を受けております！」

門兵の答えにジュリアス様は顔をしかめました。

聖教区を囲む不浄の壁やこの聖門は、パルミア教の管轄下にあります。つまりここにいる門兵は、パルミア教の僧兵ですね。

ジュリアス様は面倒くさそうに彼らを睨みつつ、再び声を張り上げます。

「そんな報告は受けていない！ それに今日は王宮から使者が行くと、聖教区全体に正式に通達されているはずだ。それを知っていて門を閉鎖するなどありえんぞ！」

「う、承^{うけたまわ}つておりません！ 申し訳^{わけ}ございませんがお引き取りください！」
なにやら雲行きが怪しいですわね。

「ちつ、サルゴンのためきジジイめ。やってくれる」

「国王陛下に指示をいただければよろしいのでは？」

「無理だ。父上はいま、大陸諸国との会議に出ているため、一ヶ月は戻ってこれない。それを知っていてわざと嫌がらせをしてきたのだらう」

あら。それはまた、都合の悪いタイミングでしたわね。

彼らにとつては、好都合なのでしようけれど、妨害されるこちらはたまったものではありません。

「聖地巡礼の妨害をするのが目的に違いない。稚拙^{ちせつ}で子供じみた嫌がらせだ」

「殿下！ 我^{わが}らが教皇^{けいこう}殿下^{かみかみ}を貶^{おとし}めるようなことをおっしゃるのはやめていただきますよう！」

ジュリアス様の挑発^{てんぱつ}に^{こた}へるように、門の上からヒステリックな声が響き渡つてきます。

見上げると、バルミア教の僧服を着た肥満体型の殿方が、兵を押しつけて姿を現しました。

「早速親玉がお出ましか。こうもあっさり釣られるとは面白みがないやつらだ。そうは思わんか、スカレット」

つまらなそうに同意を求めてくるジュリアス様には申し訳^{わけ}ないのですが、私はいまそれどころではありません。

節制という言葉とはかけ離れた、見るからにだらしないあの体型。

「高慢な口ぶりと人を見下すことに慣れきつた目つき。」

あちこちに高価な宝飾品を身につけたその出^{いで}立ち^{たち}は、まさしく私の大好物である悪人^{おにく}そのものでございます。

ああ、できることならばいまずぐに見張り台上がっていつて、この拳^{こぶし}をあの肥^こえ太^こったお身体に叩き込みたい。

でも、果たしてあのお方は、本当に私が殴るに値するような悪人なんでしょうか。「わかりきってはいるが、一応聞いておこうか。貴公、何者だ？」

ジュリアス様の問いに、僧服を着たお方が誇らしげに名乗りました。

「私の名前はジャルモウ。恐れ多くもバルミア教の異端審問官を務めさせていただいている者です。以後お見知りおきを、ジュリアス殿下」

ジャルモウと名乗った男の言葉に、ジュリアス様が顔をしかめて問い返します。

「異端審問官だと？ いつそのような役職を作ることが許された？ 我が国は信仰の自由を保証している。いくらパルミア教が国教であっても、他の信仰を排除することなど断じて許されるものではない」

「偉大なる我らが女神、パルミア様が許されました。よって異端者はすべからく排斥します。これを行うは我々の宿命。何人たりとも妨げることは許されません。たとえ相手が殿下だったとしてもです」

これはまた……とんでもないことをおっしゃいますね。

ここまで行きすぎた思想の教徒がいるなんて、流石に聞いたことがありません。俗に言う狂信者というやつなのでしょうか。

「たとえ貴公らの神が許したとしても、我が国を統治しているのは国王陛下であり、国政に関わる決定は王国議会でなされるものだ」

フン、と鼻を鳴らしながら、ジュリアス様が吐き捨てるように告げました。

「しかるべき手順を踏んでいない以上、貴公らがどんな大義名分を掲げようと、その行為は看過できるものではない。覚悟はできているのだろうか？」

「どうぞご自由に。ですが、私達に手を出してみなさい。教皇陛下の不興を買って、痛い目を見るでしょうね」

「ほう。貴公らが裁かれた場合、私が教皇の不興を買うのか。では異端審問官などというふざけた組織は、教皇の認可を得ているものだと考えていいのだな？」

ジュリアス様がそう問い詰めると、ジャルモウさんは大きく目を見開き、こちらを指さして大声で叫びました。

「なにを当たり前のことを！ 我ら異端審問官は異端者どもをなぶり殺しにするため、聖なる鉄槌を託されている。いわば偉大なる女神の使徒なのだ！ 教皇陛下が最も信頼を置いていると言っても過言ではない、選ばれし者。それが私達である！」

そう言ってジャルモウさんは背中にも手を伸ばし、僧服の中から先端に鉄球がついた棍棒のようなものを取り出します。

確かあれは、モーニングスターという武器だったかしら。

魔を祓う聖職者が、悪魔と対峙する時にあいつた武器を使うことがあると聞いたことがありません。

これは面白くなってまいりました。

「ご覧あれ！ これぞ異端者を処刑するために女神パルミア様から託された魔道具、なる雷槌！ これで彼奴らの信仰ごと頭を叩き割り、神罰を下してくれる！」

先端についた鉄球を振り回しながら、血走った目でこちらを睨みつけてくるジャルモ

ウさん。

悪人っぽいのは見た目だけだったらどうしようかと思っていました。はい、人格も申し分ありませんね。彼の発する一言一句が耳に入るたびに、このお方が我が国に存在してはならない邪悪な存在だということが伝わってまいります。

ゴドウィン様以来でしょうか、これほどのお肉と巡り会えたのは。正直そられます。「よし、言質は取った。あとは好きにしていぞ」

満足そうなお顔でジュリアス様が言い、私のうしろに下がりました。

いつの間にかその手には、音声を記録する魔道具が握られております。

どうやらジャルモウさんの発言を記録していたようです。これを使って、バルミア教に責任を追及するつもりなのでしょう。

なんとという抜け目のなさ。流石は腹黒王子ですわね。

「それを使えばバルミア教の教皇様を処罰することはできそうですか？」

「ないよりはマシ程度だろうな。問い詰めたところで知らぬ存ぜぬを決め込むだろうし、精々が下っ端の尻尾を切っておしまいだろうよ。面倒なことだ」

「それはそれは。残念でございますね」

「嬉しそうに言われても慰められた気にすらならん。ほら、さっさとやってしまつてく

れ。会合の時間も追っているのだ。時間は有限なのだから、無駄にするなどもつてのほかぞ」

せつがちですわね、もう。

ご馳走を前にした期待感を、少しは楽しませてくださいまし。

「最後に確認いたしますが——本当によろしいのですね？ あれをブン殴つても」

「かまわん。相手は聖職者の皮を被つた、犯罪者予備軍だ。派手にやれ」

安心いたしました。それでは思う存分、好き放題にやらせていただきます。

「おや？ 誰かと思えば、貴女はスカレット・エル・ヴァンデイミオンではありませんか」

歩み出た私を見て、ジャルモウさんが鉄球を振り回す手を止めました。

「あら、私のことをご存じで？ 光栄ですわね」

「ええ、知っております……知っておりますとも！」

見張り台から身を乗り出し、ジャルモウさんが目を見開いて叫びます。

「貴様こそ！ バルミア教の最も忌むべき怨敵！ 我らが同志、大司教ゴドウィン様を卑劣な罠にはめた邪悪の権化！ ここで相見えることが叶うとは、なんとという僥倖！ いますぐにその頭を叩き割つてあげましょう！」

「……大司教、ゴドウィン様？」

頭に疑問符を浮かべながら振り返ると、ジュリアス様も肩をすくめてお手上げのポーズを取っておりませぬ。

えっと、あの方はバルミア教ではそんな地位だったのですか？

というか、そもそも彼はバルミア教の教徒だったのですか？

信仰心の欠片かけらもなさそうな方でしたが……なんだか意外な一面を知ってしまいました。ですが、まあそれがどうしたというお話です。だつて――

「ゴドウィン様と繋がりがあったということは、殴る理由がひとつ増えましたわね」
行く手を阻む聖門に歩み寄った私は、手の平を門扉もんびに這わせませぬ。

ジャルモウさんはメインディッシュ。彼のお相手をする前に、まずはこの門を開くところから始めましょう。

高さ五メートル、幅はその倍はありそうな大きな木造の門には、内側から門かどが掛けられているようでした。これはとても人の力では開きそうにありませんね。

それにこの門、ただ門かどが掛けられているだけではないようです。

手の平から、聖教区を囲っている不浄わじようの壁かべと同様の神聖な力を感じました。

「素晴らしいでしょう、その聖門は。女神バルミア様の使いによって、聖防御の結果が

張られているのですよ。破城槌はせいづちを使っても傷ひとつつけられず、魔法の類たぐいはすべて撥ね返されます。まさに神の奇跡と呼ぶにふさわしいでしょう。そうは思いませんか？」
決して壊れず、魔法も効かない門。これを外側から開ける手段はないと言っているでしょうね。

まあ、私には関係ありませんが。

「神の奇跡だなんて、ただの門ひとつに随分と大げさなことをおっしゃいますのね」

目を閉じ、加護の力を手の平に集中させませぬ。

確かに通常の人間の力では、この門を開けることはできませんでしょう。

ですが、同じ神の奇跡をもってすれば……

「――開きなさい」

ドゴーン！ と派手な音を立てて聖門が吹っ飛び、聖教区の奥へまっすぐ飛んでいきます。

それは門の向こう側に立っていたバルミア教の教会に激突すると、建物を崩落させながらバラバラに砕け散りました。

「扉なのですから、押して開ければいい――ただ、それだけのお話でしょう？」

何事かと思張り台から下りてきた門兵の方々が、破壊された門を見て顔を青くします。

なにをそのように焦っているのでしょうか。私はただ、閉じていた門を開いただけですの。

「め、女神バルミアの加護厚き聖門が……」

「武器も使わず、素手で押し開いただと……?」

「ば、化け物……!」

門兵の方々の失礼なつぶやきを聞き流しつつ、ぶらぶらと手を振って手首の関節をほぐします。

久しぶりに力を使ったので、少し力みすぎたかしら。

まさかあんな遠くまで門が飛んでいくとは思いませんでした。

もしかして硬くて重そうなのは見かけだけで、本当は中に綿でも詰まっていたのかしら。

それとも、みなさまが門の開け方を間違っていたとか?

引いて開ける扉だと思っていたら押し開ける扉だった、などはよくあることですし。ああ、きっとそうですわね。

だって、あれだけ大仰に聖門を讃え上げていたのに、実際はか弱い乙女である私の細腕一本で粉砕できるなんて。普通に考えてありえませんか。

「みなさま、気づいていらっしゃらないようなので教えて差し上げましょう——この門は押して開けるのですよ」

「「知っとるわー!」」

盛大なツツコミを入れられてしまいました。解せません。

「貴女にしては気の利いたことをするな。ご苦労」

私のうしろで腕を組んで立っていたジュリアス様が上から目線でそう告げると、門扉のなくなった聖門を馬車が悠々と通過していきまます。

ここから目的地まではまだ距離がありますから、馬車は必要です。都合よく利用された気がしなくてもないですが、まあよしとしましょう。

ぶらぶらと手を振りながらジュリアス様のところまで戻ると、彼は怪訝そうな顔をなさいました。

「どうした? いままで手でも痛めたか?」

「まさか。戸を開くだけで手を痛める者などおりません」

「箱庭で蝶よ花よと育てられたご令嬢という生き物は、スプーンやフォークよりも重いものを持たぬと聞く。虚飾と業で塗り固められた扉を力任せに開けば、手ぐらい痛めでもおかしくはあるまい?」